平成26年7月15日発行 （年4回1、4、7、10月の15日発行） 第19巻第2号〈通巻74号〉

LONGSTAY®

住んでこそ、心が繋がるロングステイ

2014 Summer

特集
ディープ・ロングステイ

Long Stay

一般財団法人ロングステイ財団
「Long Stay」はロングステイ財団の登録商標です

巻頭インタビュー

ジョン・ギャスライト

John Gathright／1962年アメリカ・オレゴン州生まれ。カナダ・ブリティッシュコロンビア州育ち。1985年来日、南山大学経営学部経営学科卒業、名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程修了。2007年ツリークライミングを利用したセラピー研究で農学博士を取得。趣味はツリークライミング、バグパイプ、アウトドアスポーツ、スキューバダイビング。中部大学教授、志学館大学客員教授。ツリークライミングジャパン代表、NPO法人ツリークライミングジャパン理事長。

夢が持てないなら、人の夢を応援する側にまわればいい

下駄の国に憧れて

5歳の頃、カナダ西海岸のバンクーバー島という島に住んでいました。海辺に遊びに行くと、波打ち際にいろいろな漂流物が打ち上げられているんです。日本からのものが多く、一升瓶や弁当箱、漁具など、いろいろなものが流れてきましたが、ぼくにはそれを集めるのが小さな楽しみでした。ある日、見慣れないものを見つけました。下駄でしたが、当時はそれがなんだか理解できません。鼻緒がなくなっていて、いったいこれはなんだろうと思い、とりあえず家に持ち帰って、祖父に尋ねました。祖父はその奇妙な物をしげしげと見つめ、これは本立てだろうと言いました。というのも、逆さまにすると上を向いている歯が本を立てるのにぴったりだったからです。わが家ではそれ以降、拾ってきた下駄はテーブルの上で本立てとして活躍しました。

それからしばらくしてテレビを観ていると、日本の時代劇をやっていました。ぼくはその中でサムライの足元を見て、それが下駄だということを知ったわけです。不思議な国、日本。それは長じるにつれて憧れの国に変わっていきました。留学先に名古屋を選んだのも、英語で書かれた戦国時代の三武将（信長・秀吉・家康）に関する本を読んで、同じ日本に住むなら名古屋と半ば決めていました。この本は、小学校3年

生のときに下駄を拾った話をした先生が、ぼくに読むようにと勧めてくれた歴史物です。それでぼくは南山大学を留学先に決めました。

どこに行っても安心できる国

当時、日本はバブルの時期で都会には近代的なビルが建ち並び好景気に沸いていましたが、それでも一歩郊外に出ると、そこには古い懐かしい日本がありました。過去、現在、未来…それが一体となっている面白い国。よく日本は物価が高いと言われますが、日本人と同じ暮らしをすれば、決してそうではありません。アメリカやメキシコ、フランスにも旅行したことがありましたが、多くの外国は物価の安いところは治安の面で問題のあるところが多い。ところが、日本はどこに行っても本当に安心して暮らすことができます。

覚えた日本語は「これ、それ、あれ」「どうもどうも」。これだけ話せれば、日本はどこでも暮らしていくことができることを知りました。ぼくは、機会ある度に自転車にまたがって日本中に出かけていき、目的のない旅を楽しみました。

日本永住を決意させた出来事

とくに印象に残っているのは、岐阜県の高山に自転車で出かけたときの出来事です。名古屋の自宅を出て、下呂温泉あたりに到着した頃はすっかり暗くなっていました。予約していた高山のユースホステルに連絡するにも、当時は携帯電話というものもなく、田舎なので周辺に公衆電話も見つかりません。真っ暗な田舎の道を進んでいくと、一軒の農家に小さな電灯が（それは屋外の便所の明かりだったのですが）点っているのを見つけました。

ぼくはきっとだれか起きているだろうと玄関に近づいて何度も表戸を叩きました。しばらくして人の気配がして、戸を開けたのは老婆でした。ぼくの顔を見るなり、びっくりして「おじいちゃん～、ガイジンおるわ」。彼女はそう言って戸を閉めてしまいました。ぼくは困って「道に迷ったこと、お金もないこと、ただ電話を借りたいだけ」という意味のことを拙い日本語で叫び続けました。

すると、今度は年老いた主人らしき人物が戸を開けて、しばらくじいとぼくの顔を見つめ、黙ってぼくを家の中に招き入れてくれました。あとから知ったことですが、その時のぼくの日本語は「行き先ない、電話ください」と言ったそうです。このガイジン、何言ってるんだろうと思ったそうです。それでも、この老夫婦は素性の知れないガイジンにごはんとお風呂も用意してくれたのです。長い廊下を行くと昔ながらの風呂があり、おじいちゃんが入り方を説明してくれました。しかし、片足をつけると飛び上がるくらい熱いお湯。ぼくは「茹でて殺そうとしているんじゃないか」と疑ったくらいです。なんとかお湯に浸かって、お風呂の外に出ると、案の定ぼくの服が消えてなくなっていました。ああ、衣服も盗まれたと（笑）。いやそうではありません。代わりに、きちんと畳んだ浴衣が用意してあったのです。

さらに驚いたのは、仏壇を置いた部屋にふとんが敷いてあり、その夜ぼくはなんと老夫婦の間に川の字になって休みました。ぼくの感激がどれほどのものだったか。翌朝、早起きして農作業をお手伝いしてせめてもの感謝の気持ちを表そうとしましたが、慣れないぼくの野良仕事がどれだけ役に立ったかは分かりません。やさしいおじいちゃんとおばあちゃん。ぼくに日本に永住したいと決意させた最大の出来事でした。

日本語ができるようになった数年後、私は再び老夫婦を訪ねました。日本語できちんとお礼がしたかったし、いあの時、どうしてぼくを親切にもてなしてくれたのか知りたかったからです。

おじいちゃんは言いました。「このあたりでガイジンさんを見るのは初めてだった。ガイジンさんでも日本人でも目は持っている。言葉は分からなくても目を見れば怪しい人かどうかは見分けがつくよ」「戦争を経験して、つらい思いもいっぱいして80年以上生きてきたが、そのガイジンさんと一緒にごはんを食べてお風呂に入って、一緒に寝るなんて夢にも思わなかった。きみもカナダに帰って困った日本人に会ったら同じように親切にしてあげてね。そうしたら二度と戦争なんて起きないよ」と。

大学を卒業していったんカナダに帰り、そこでロングステイ中の弘子と知り合い、恋に落ちました。彼女はカナダに永住したいと願いましたが、ぼくは日本に行くことを希望し、結論が出ないままぼくは再び来日し、日本からカナダにいる彼女にラブレターならぬ電話とファックスを送り続けました。彼女がぼくのプロポーズを受け入れてくれたのは、それからしばらくたってからでした。

木に登ると、新しい世界が見える

ツリークライミングに夢を乗せて

1993年に二人は結婚して子どもを二人授かりました。子どもにはぼくは英語で、妻は日本語で話しますので、子どもたちはバイリンガルです。その後、現在の場所に引っ越してもう17年近くになりますが、山の上に住んでいますので、自然がいっぱいです。コンビニはありませんが、このあたり全体が自然のコンビニです。畑でとれたての野菜がふんだんに手に入ります。さらに、近所の人たちが親代わりに子どもたちにいろいろな大切なことを教えてくれます。ザリガニのとりかたや食べられる山菜、竹トンボの作り方、草履の編み方など、数え上げればキリがありません。ある日、池に落ちてずぶ濡れになった衣服を風呂敷に包んで大人のステテコを着せてもらって帰ってきたときには大笑いしました。と同時に、涙が出るくらいうれしく思いました。こんなに思いやりのある親切な国がほかにどこにあるでしょうか。71歳になるぼくの母も、こちらに来てロングステイを楽しんでいます。孫に会える楽しみ以外に日本各地を旅する喜びを知りました。どこを旅しても日本人は親切だし、異国で体験するような怖い目に遭うことは珍しい。母は「日本はデザートだ」と言います。甘くて安心してパクパク食べられるという意味です。

ツリークライミング体験がもたらすものに注目

ぼくが木のぼりを始めたのは、子どもの頃、どもる癖があって、そのせいでいじめられたりしました。両親が離婚し、新しい父にもなじめず寂しい思いをしていました。そんな傷つきやすい少年の心を救ってくれたのは祖父でした。祖父はぼくの話を聞いて、黙って大きなシダーの木の下に連れていきました。学校に詰め寄るわけでもなく、父に意見をするわけでもなく、ぼくに木に登るように勧めました。言われるままに二人で一緒に木に登ると、そこには見たことのない世界が広がっていました。気に病んでいる学校、家、そして町がちっぽけに見えました。そうか、おじいちゃんが言っているのはこのことかと、子ども心にそう思いました。家のこと、学校のことでうまくいかないなら、自然の中でいっぱい遊ぼう。

ぼくはこれを機に自然の中で遊ぶことを知りました。木の上の小屋＝ツリーハウスを作って、まわりをびっくりさせました。ぼくをからかっていた同級生たちが向こうのほうから友だちになりたいとぼくに近づいてきました。おじいちゃんが言ったとおりでした。「ジョン、きみが友だちを追っかけていけば、ずうっと追っかけていかねばならない。そうではなくて、自分が面白いことをやれば、向こうのほうから寄ってくるよ」

世界初、木のぼり博士の誕生

子どものときのこの経験が、今のぼくの中に生きています。重度身体障害者の57歳の女性がぼくのところにやってきて世界一高い木に登りたいと言ってきました。ぼくはいろいろ思案して、彼女をサポートできるのはぼく以外にないと思い、引き受けることにしました。安全に木のぼりできるように専用のギアを開発し、どこに世界一高い木があるか調査しました。結局、挑戦したのは世界で5番目に高い木で、アメリカの西海岸カリフォルニア州の山中にあるジャイアントセコイアでした。個人の持ち物でしたが、事情を話して木のぼりの許可をもらいました。こうして彼女は、2001年、見事に重度障害者として世界初80メートルの木のぼりに成功したのです。たかが木のぼり、されど木のぼりです。ツリークライミングを通じて、障害のある人が自信を取り戻し、前向きに生きていくことができる。ぼくは、ツリークライミングのセラピーに着目し、名古屋大学の農学部博士課程で論文を書きました。テーマはツリークライミングの身体的、精神的、社会的効果のプログラムづくりです。4年半かけて取得した世界初木のぼり博士です。また、2000年に設立したツリークライミングジャパン（本部はアメリカ）で木のぼりを通じた自然とのふれあい、環境にやさしい心を育てる活動を行っています。現在では木のぼり有資格者3000人以上、木のぼり経験者は25万人以上、木を守る樹木医の育成もサポートしています。

「夢が持てないなら、人の夢を応援する側にまわればいい」。いましみじみと思い出されるのは祖父が語ってくれた言葉です。祖父が引っ込み思案だったぼくに言い含めたことを、ぼくは大人になって噛みしめています。